

熊野の無社殿社と伝承の関係性について —フィールドワークを主として—

安宅 哲平

(堀田 穰ゼミ)

● はじめに

熊野とは三重県南部、和歌山県南部からなる地域で紀伊半島の南端部をしめている。熊野という熊野三山からなる熊野本宮大社、熊野那智大社、熊野速玉大社などが思い出させるが、地域に存在する神社の中で無社殿社が多く存在しているのも熊野という地域の特徴である。無社殿社とはその名の通り社殿がない神社のことであり、現在現存している神社には多くは社殿が建てられている。無社殿社では鳥居、または鳥居自体建てられておらず、自然物を神座として信仰されている。このような無社殿社は数が少なくなっていると言われているが、熊野では多くの無社殿社が今も残り続け、信仰されている特殊な地域である。なぜ熊野の地域では無社殿社が残っているのか、社殿を建てず神座をそのままの形で残されているのか、理由の一つとして伝承が関係していると考えられる。熊野の無社殿社と伝承の関係性について論じていきたいと思う。

● 先行研究と方法

先行研究として主になったのが『熊野山海民俗考』と『紀伊続風土記』である。

『熊野山海民俗考』野本 寛一 人文書院 1990年
フィールドワークと聞き取り調査によって著者野本 寛一の視点から見た熊野について書かれた一冊。熊野三山のことは勿論、農業や漁業、熊野山地生業構造、海の環境と民俗や熊野の臨界信仰、熊野の自然物の信仰について書かれている。特に貴重なのが実際に著者の聞き取り調査による地元の話である。本が書かれたのが1990年のため30年以上前に行われた調査である。熊野には限界集落など多く、老人の割合が特に大きい。また口承として伝えられているため実際にその人に聞いた口承は大変貴重である。

『紀伊続風土記』四輯一九五巻 仁井田好古編
天保十年成立の和歌山藩による地誌、原本高野山蔵
テキストとして和歌山県神職取締所（明治43）
活字版、国立国会図書館蔵を使用する。

今回『熊野山海民俗』の第三章「神々の座の森と樹々」にてこのような以下の内容が書かれていた。
「神社の社殿を建ててはいけないという禁忌は、当社をはじめとして、和歌山県西牟婁郡中辺路町西谷の山神森（中略）などに共通して見られる。しかも、『鳥居や社殿を建てるなら境内の木よりも高く』という条件がつく場合が多い。（中略）木の高さ、神の依り代としての木の高さの絶対性を信じ讃えてきた人々の伝承なのである」（野本寛一『熊野山海民俗考』1990年）[1]

神社の社殿を建ててはいけないという伝承がいくつあると明記されている、実際に熊野には無社殿社は多く存在しているため熊野の無社殿社と伝承には関係性があると見られる。『熊野山海民俗』を基準にしながら、熊野の無社殿社と伝承の関係性を見ていきたい。

第一章 熊野の自然信仰

熊野には多くの自然物を神座として信仰している神社が多く存在している。神座というのは神霊が宿る神体のことを指している。原初の信仰形態である自然物を座とした信仰が残っているというのが熊野の特徴でもある。

● 岩・岩壁

自然物を座とした信仰が多い熊野だが、特に特徴的なのは岩壁を座としたものである。特に熊野には奇妙な形をした岩壁が多く存在している（例、花窟神社 神倉神社など）多い理由としては熊野地方特有の「熊野酸性岩」が関係してくる。熊野

熊野の無社殿社と伝承の関係性について—フィールドワークを主として—

という場所は本来地層にマグマが流れ込み冷え固まってできた地盤である。そのため本来の土や樹などはなくそこからかぶせるようになっていたため山や谷に巨大で異様な岩壁が露出している場所が多いという熊野地方特有の景観が生まれていった。そのため特殊な景観から形状に即した命名を誘い、その物自体に神が宿ると信じられ岩壁信仰が生まれていったのではないだろうか。

● 森と樹々

楠や樺、檜 森そのものを神座としている。特に熊野ではこういった森や樹々を神座としている場所が多い。理由の一つとして考えられるのは熊野という地域の多くは林業として支えられていたため山神に対しての信仰が大きかったと考えられる。また和歌山では「紀の国」と呼ばれ木を神木として祀る場所も多く、木には特別な思い入れがある。

表1 岩(野本 寛一『熊野山海民俗考』1990年)[2]

	神社名	所在地	神座	社殿
1	花窟神社	三重県熊野市有馬	岩壁	/
2	丹倉権現	三重県熊野市丹倉	岩壁	/
3	赤倉神社	三重県熊野市赤倉	巨岩	/
4	産土神社	三重県熊野市大井谷	岩壁	/
5	岩倉神社	三重県熊野市大河原	岩	○
6	神倉神社	和歌山県新宮市	巨岩	○
7	神明神社	和歌山県東牟婁郡那智勝浦町高津気	岩	○
8	秋神社	和歌山県東牟婁郡那智勝浦町色川	岩壁	/
9	矢倉神社	和歌山県西牟婁郡串本町田子小宇便田	岩壁	/
10	矢倉神社	和歌山県西牟婁郡串本町田子小宇安指	岩	○
11	矢倉神社	和歌山県東牟婁郡古座川町立合	岩	/
12	矢倉明神社	和歌山県新宮市	岩	/

表2 森と樹々(野本 寛一『熊野山海民俗考』1990年)[3]

	神社名	所在地	神座	社殿
1	石神神社	三重県熊野市湯ノ谷	楠	○
2	引作神社	三重県南牟婁郡美浜町引作	楠	○
3	有田神社	和歌山県西牟婁郡串本町有田	楠	○
4	八坂神社 境内社	和歌山県東牟婁郡古座川町伊串	楠	○
5	菟明神森	和歌山県東牟婁郡古座川町月野瀬	(樺)	/
6	木業神社	和歌山県東牟婁郡古座川町田原	/	/
7	矢倉明神森	和歌山県東牟婁郡古座川町峯	(森)	/
8	矢倉明神森	和歌山県東牟婁郡古座川町井谷	(森)	/
9	矢倉神社	和歌山県西牟婁郡串本町田並	森	/
10	矢倉神社	和歌山県西牟婁郡すさみ町口和深	森	/
11	矢倉神社	和歌山県西牟婁郡すさみ町上村	森	/
12	矢倉神社	和歌山県西牟婁郡すさみ町下村	森	○
13	高倉神社	和歌山県東牟婁郡熊野川町大山	(檜)	/
14	矢倉明神森	和歌山県東牟婁郡古座川町池野山	楠杉	/
15	矢倉明神森	和歌山県西牟婁郡日置川町玉伝	(森)	/
16	矢倉明神森	和歌山県西牟婁郡日置川町大	(森)	/
17	虫逐明神森	和歌山県西牟婁郡上富田町朝米	(楠)	/
18	山神森	和歌山県西牟婁郡中辺路町西谷	(森)	/
19	日生 大明神森	和歌山県西牟婁郡日置川小川	(森)	/

20	地主 大明神森	和歌山県西牟婁郡 日置川小川	(森)	/
21	大宝天王森	和歌山県西牟婁郡 日置川小川	(森)	/
22	地主神森	和歌山県西牟婁郡 すさみ町矢野口	(森)	/
23	槻宮森	和歌山県西牟婁郡 すさみ町矢野口	(櫟)	/
24	産土神森	和歌山県東牟婁郡 本宮町請川		/
25	宝大神森	和歌山県東牟婁郡 古座川町洞尾		/
26	矢倉明神社	和歌山県東牟婁郡 古座川町大川		
27	矢倉明神社	和歌山県東牟婁郡 古座川町三尾川		
28	矢倉明神社	和歌山県西牟婁郡 串本町里川		
29	矢倉明神森	和歌山県西牟婁郡 日置川町小川		
30	矢倉大臣社	和歌山県西牟婁郡 すさみ町矢野口		
31	矢倉明神社	三重県南牟婁郡紀 和町矢ノ川		

● 水

川だけではなく滝や淵、井戸などを神座として信仰している。滝を御神体とする以前の物で雨乞いや滝主伝説を伝えるものもある。このような滝は谷々、村々で民俗の核となった滝を伝えている。また井戸も同じように信仰されている。このことから、昔の村では真水が人々の生命線であり、そういった自然物を敬い枯れぬよう、神霊が宿り保ち続けるよう願っていたと考えられる。

● 島

熊野は太平洋に沿った形で存在し、海とも関わりが深い。特に熊野は補陀落渡海が行われるなどしたため海に対しては特別な感情を持っていたのかもしれない。河口・湾口の島に弁天を祀る形が多く、湾口に適当な島がない場合は、湾の入り口

のどちらかに岬角に弁天を祀る形になっている。

古く、入江で海彼から神を迎えた場合、湾口の島を神座とした。のちにこうした島に弁天祠を設け、湾の出入りに豊漁や海での安全を祈った。

表3 水(野本 寛一『熊野山海民俗考』1990年)[4]

	神社名	所在地	神座	社殿
1	矢倉神社	和歌山県西牟婁郡 串本町矢ノ熊	井戸	/
2	真名井社	和歌山県東牟婁郡 本宮町本宮	井戸	石祠
3	熊野那智 大社別宮 飛滝神社	和歌山県東牟婁郡 那智勝浦那智山	滝	/
4	大馬神社	三重県熊野市井戸町	滝	○
5	滝神社	三重県熊野市柳谷	滝	○
6	白衣観音	和歌山県西牟婁郡 串本町吐生	滝	○
7	(雫の滝)	和歌山県西牟婁郡 すさみ町上戸川	滝	/
8	(平治の滝)	和歌山県東牟婁郡 本宮町平治川	滝	/
9	ジンジンオ ウボンテン タイシャ	和歌山県東牟婁郡 古座川町奥蓄	滝	/
10	相須産土社	和歌山県東牟婁郡 熊野川町相須	淵	/

表4 島(野本 寛一『熊野山海民俗考』1990年)[5]

	神社名 (島)	所在地	神座	社殿
1	河内明神社	和歌山県東牟婁郡 古座川町宇津木・ 古座川	島	/
2	(御舟島)	三重県南牟婁郡紀 宝町・熊野川	島	/
3	(大斎原)	和歌山県西牟婁郡 本宮町・熊野川	島	○
4	弁天神社	和歌山県東牟婁郡 さすみ町	島	○

熊野の無社殿社と伝承の関係性についてーフィールドワークを主としてー

5	弁天神社	和歌山県西牟婁郡 すさみ町見老津	島	○
6	春日神社	和歌山県西牟婁郡 江須之川	島	○
7	(通夜島)	和歌山県西牟婁郡 串本町大島	島	○
8	弁天神社	和歌山県西牟婁郡 串本町橋杭	島	○
9	弁天神社	和歌山県東牟婁郡 古座川町	島	○
10	(通夜島)	和歌山県東牟婁郡 那智勝浦町	島	/
11	弁天神社	和歌山県東牟婁郡 那智勝浦町	島	○
12	(金光坊島)	和歌山県東牟婁郡 那智勝浦町	島	/
13	海士神社	和歌山県新宮市 三輪崎	島	○
14	巖島神社	和歌山県新宮市 三輪崎	島	○
15	(魔見ヶ島)	三重県熊野市磯崎町	島	/
16	(笹野島)	三重県熊野市 二木島湾	島	/
17	(大石島)	三重県度会郡 紀勢町錦	島	/

表を見てわかる通り、多くの神社には神座とするものが存在するが社殿のないものが多くある。特に森や樹々が無社殿社として多く存在している。

上記の三つの図(図1、図2、図3)は宮本 誼一著の「忘れられた熊野ー熊野大辺地筋に残る矢倉神社の群落ー」にて熊野大辺地筋の矢倉神社群と古祠の図説によって書かれた手書きの地図を地図地理院によって訂正したものである。ほとんどの場所が社殿のない神社として紹介されているため、この数の無社殿社が密集しているのがわかる。熊野と呼ばれる和歌山県南部と三重県南部のほとんどが山で覆われているのが地図でわかる。そして多くの神社が川に沿ってあり、山側に点在しているのがわかる。これは熊野地方では林業が盛んで、人々が山で木を伐り、川の流れを利用して、



図1 東熊野海岸の古社

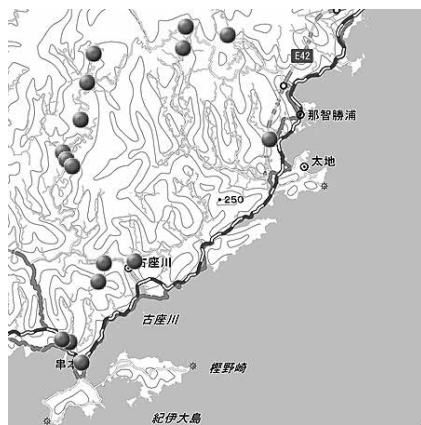


図2 承前



図3 大辺地中央部の古社

木を運んでいたということがわかる。そのため、熊野では川または道に沿って集落がいくつも点在し、そこで林業の安全祈願として自然物を神座としていたことが容易に理解できる。

第二章 無社殿社と矢倉神社

『熊野山海民俗考』の表を見てみると、「矢倉」と名の付く神社が多く存在しているのがわかる。特に表2で比較すると、森や樹々を神座とした神社は31社あるが、その内16社が「矢倉」「高倉」と名の付く神社である。また「矢倉」と名の付く神社の多くは、社殿のない神社として残っている。ここからは「矢倉」という神社はなぜいくつもあるのか、また、「矢倉」系統の神社の特徴などを紹介したいと思う。

● 矢倉神社の共通項

熊野に存在する「矢倉」または「高倉」と名の付く神社はいくつの特徴がある。特徴は以下の通り。

- A 磐座・巨木・森・滝・泉・窟・鳥などを神体とし、前面に神座を置き、ま垣を設けない。
- B 社殿を建てないことを守る。建てれば火災になると伝承されている。木葉神社では現に火災に遭っており、現在は無社殿に戻っている。無社殿神社と言っても、雨の日の祭事があるので、拝殿は設けられている。
- C 熊野の信仰の特徴として玉石を捧げるが、補助的なものである。
- D 祭日は旧暦11月24日、または冬至。

以上の四つが「矢倉」または「高倉」と名の付く神社の特徴である。特徴的なのは自然物を神体とした信仰、そして「社殿を建てないことを守る」という伝承があるという事。いくつか例外があり、社殿が建てられている矢倉神社も存在するが、今なお社殿が建てられていない神社も多く存在している。

● 矢倉という名前は何か故ついたのか

上記の『熊野山海民俗考』の表にて多く記載されている「矢倉」という神社があるのがわかるだろうか。『紀伊続風土記』にも計19社ほど「矢倉」と名の付く神社が明記されている。矢倉と言われれば想像するのは木材などを高く組み上げて造った建物を想像するだろうか、しかし矢倉神社のほとんどは社殿がない、いわゆる高く組み上げて建てられた建物はなく、そもそもそういった建物がない神社が矢倉神社と呼ばれている。では矢倉と

いう名前はどこから来たのか、様々な説があるが大きく3つに分けられている。

・山林地主の矢倉家から命名された

矢倉家の山林取得は江戸時代から始まっているが、元々は鱈や鯨漁の網本だったと言われている。

矢倉を「やぐら」と発音し、矢野熊の矢倉神社と現当主の住まいからも遠くないため、地元の名士として神社との関わりは深いと考えるのが自然である。しかし現当主の矢倉官兵衛氏が言うにはそれほど深く関わっていなかったという。

「神社の近くに住んでいた田島家が長年、そのめんどうを見てきた。串本の矢倉の姓の家には二つの流れがあり、矢倉神社に関係したのは、うちとは別の家系の方だったのではないか。7月の祭りには我が家では祖母や母が参加したけれど、父の父は行かなかった。父から矢倉神社のことを聞いた記憶はありません」(桐村 英一郎『祈りの原風景 - 熊野の無社殿神社と自然信仰』2016年) [6]と話している。

関わりが深いのであれば何かしら矢倉神社の話が伝えられるはずではないだろうか。資料に乏しく、矢倉家の祖先は18世紀後半ぐらまでしかさかのぼれないこと、近くの矢倉神社との関わりも濃密ではないことなどから、山林地主の矢倉家から矢倉神社の命名と関連した可能性は薄いと考えるのが自然である。

・七上綱の矢倉家から名付けられた

上皇や法皇の熊野御幸が盛んだった平安時代、熊野三山の神職や社僧を束ねて権力を握っていたのが熊野別当である。

熊野別当の力は承久3年(1221年)の承久の乱に続く内部抗争などで衰退し、歴史の表舞台から消えていった。そして熊野別当家に代わって熊野地域を取り仕切ったのが別当家の流れを汲む七上綱(七人衆)、宮崎、箕嶋、矢倉(後に鶴殿)、瀧本、中曾(中脇)、芝、楠(新宮または新)の各氏である。『熊野年代記』は応永7年(1400年)の項にて「正月七人上綱上京し、各位階す」と記されている。

七上綱のひとり矢倉氏の出自は明らかにされていないが、矢倉氏の本拠が新宮市街地に今も残る明神山にあり、そこに矢倉明神が鎮座していたの

だ。『続風土記』は新宮の矢倉明神社が「岩山の中腹にあるから矢倉明神というのだ」と説明している。その風景の連想が「高倉」に「矢倉」の名をかぶせたのかもしれない。七上綱の一角、矢倉氏の記憶が加味された可能性もある。明治以降もしばらく「矢倉」と「高倉」が併せて使われていたのだろう。

いずれにしても、新宮の明神山は矢倉神社（矢倉明神）の名前の発祥の地とは言い難く、七条綱の矢倉氏もその命名由来とはかかわりないと思われる。

・地形から命名された、という推測

「矢倉」の名は周囲の地形から名付けられたという説がある。『続風土記』には「クラ」や「ヤ」の語源について言及したくだりが五か所存在する。

1. 新宮城下の矢倉明神社

「方言に山の峻俊なるを倉といふ事神倉の條下にいへるか如し 諸荘に峻俊にの巖山に祭れる神を矢倉明神と称する事多し 大抵は皆巖の霊を祀れるにて別の社なし 矢倉の也は伊波の約にて巖倉の義ならむ」（『紀伊続風土記』）[7]

熊野地方では山の険しく巖しい部分を「クラ」といい、そこに宿るカミを矢倉明神と称し、多くは社殿がない。「ヤ」も同じように巖を表す、と言った解説が書かれている。

2. 神倉山に鎮座する神倉社

神倉社は高倉下名を祀っている。ここでは「タカクラジ」の語義について言及されている。「クラ」に久良の字をあてているが解釈は上記の項とほぼ同じである。

「神名の義 倉は久良という借字にて倉庫などの義にあらず久良は暗き義にも坐の義にもいへと此久良は峻く聳えたる形の峯をいう古語なり 古書の梯立の倉橋山並倉山岩倉山暗部山鎌倉山などいふ名の久良みな山嶽の峻なるより名つけたる事梯立の倉はしといふ詞にても知るへし 他にて嶽又岩山などいふ峻き嶽を熊野山中にては久良といふ さて其久良の下に坐す神なれば倉下とは称へたるなり」（『紀伊続風土記』）[8]

高倉下については「(穀物)倉庫を管理していた」という説もある。『続風土記』では「岩壁の下に本拠を置いていた人物」を神と讃えたという解釈である。

3. 牟婁郡周参見荘太間川村の日生矢倉明神森

ここでは「矢=谷」という解釈がされている。

「按するに矢は谷なり 倉は大巖をいふ 谷中石巖ある所をいふなるへし 又鎌倉の俚語に窟を矢倉というふよし 大巖岩窟の神の義にして山の神を祭れるなるへし」（『紀伊続風土記』）[9]

4. 牟婁郡市鹿野荘熊野村の地名由来

「慶長検地帳に伊屋村とあり今猶彌谷といふ 彌谷は四面山嶺重畳せる谷の義なり伊也転して由也となり遂に熊野の字を用ふ」（『紀伊続風土記』）[10]

これらを見ると「ヤ（イヤ）」は山間の谷を指し、周囲の山々の頂に大岩（「クラ」）がせり出すのが熊野独特の風景

5. 牟婁郡三栖荘長瀬村にある「大倉」の説明

「○大倉

伏菟村境谷狭くして纔に細径を通す 径の左鷹尾山の東面峻俊にして切岸の如き大巖あり 高さ二町 名をつけて大倉といふ 倉は壁巖の名なり 大倉より少し劣れるを小かね倉といふ」（『紀伊続風土記』）[11]

以上が『続風土記』から「ヤ」「クラ」の語源についての五例である。

矢倉明神の「矢倉」は南紀地方に多い地形、それも谷筋から岩壁を見上げるような場所で、樹木や大岩を崇めたところから命名されたのではないだろうか。神は天から降り谷から剥きだした岩壁を経て樹木や岩座に降臨すると地元の人々は考えた可能性がある。

そのため、「矢倉」という名前は人物や宗教によって名付けられたものではなく、地形を見立てその景観から、「矢倉」という名前が付いたと考えるのが自然である。

第三章 無社殿社と伝承について

● 社殿がない神社

熊野には、樹や岩を畏怖し崇めた聖所が数多く残されている。この多くは、山中や谷深き川沿いにひっそりと祀られている。紀の国は木の国であり、海の民は船材を求めて川を遡り、天をつく巨樹をカミとして祀り拝み、また太古の火山活動は

鉱物資源をもたらし、近年まで採掘されていた銅をはじめ、水銀、鉄、金などを求めて山中に分け入った採鉱者や踏鞴師なども巨樹や大岩を崇めたことだろう。

社殿のない神社や自然信仰の聖所は熊野に限った話ではない。対馬の天道信仰、壱岐のヤボサ、沖縄の御嶽なども社殿のない森だけの聖所として存在している。カミ祀りの場が社殿を持つようになったのは、仏教寺院の影響が大きく、人型ではないものを、人として祀るようになり、仏教寺院に習って社殿を建てるようになった。熊野でも神仏習合という文化が生まれ、仏と神を同一視し社殿などが建てられるようになったが、いくつかの神社は古代の神社の原型を保ったまま今も現存している。特に山側に社殿のない神社があるように思える。(図3参照)これは海沿い側に集中して町や都市があり、遠く離れた山奥の集落では、こういった影響が少なかったと考えられるが、山奥の仕事は林業が主であり、木材を運ぶにあたり川を用いていたため、他の集落とも交流があり、こういった神仏習合や建造物を建てる状況を知っていたはずだ。

ではなぜ熊野は多くの無社殿が存在しているのか。その一つとして考えられるのが、社殿を建ててはいけないという伝承が残されているからだ。社殿を建てるとうつ、不漁、災厄が起きると言わ



図4 東牟婁郡古座川町宇津木の矢倉神社(筆者撮影)奥に石祭壇、石灯籠があり、鳥居がない。

れている。そのため熊野のいくつかの神社で伝承が守られ続け、熊野は古代の信仰形態である無社殿が未だに残り続けていると考えられる。

●「空神」という概念について

『続風土記』にていくつか「空神あり」という記述がある。空神は一般的には「天狗」を指す言葉だが、『続風土記』では「天狗」だけではなく「空神」という存在を指すことがある。「空神」は無社殿社を示す語にもなっている。これは神という存在は空から降り立ち、神座を依り代とするという古代信仰の考え方であり、また「神」という存在はその場に留まり続けるものではなく、神座からはなれ空に戻る移動概念でもある。「空神」を祀るにあたり、「鳥居」がないことが条件のところもあり、それは「天には境がなく、境界を示す鳥居は必要ない」という考え方に基づくものである。

● 禁忌として伝わっている伝承

神社の文献として「社殿は建ててはいけない」という「伝承」が残されているものは少ない。代わりに口伝でそういった「伝承」が残されているところもある。

・木葉神社(和歌山県東牟婁郡古座川町井谷)

「鎮座の歴史については、文明3(1471)年社殿が火災に陥り、殆どの記録を焼失したので御由緒を知ることが出来なくなった。」(和歌山県神社庁)[12]

「社殿を作れば火事になるとの言い伝えがあり、禁を破って社殿を作ったところ、火事になって社殿は焼け落ちたそうです」(み熊野ねっ) [13]

木葉神社では社殿を建てようとしたところ火事が起きたという伝承が残されており、今なお木葉神社には社殿が建てられていない。神座自体なく、昔は樹を祀っていた。禁を破り、火事が起きるといふ伝承は、実際に神がおり、禁を破ることによって、怒り、火災が起きたという物語性が保たれ、その伝承に説得力が増し、守り続けられていると考えられる。

・山神森(和歌山県西牟婁郡中辺路町西谷)

「一村の氏神なり。境内に石灯籠ありて社なし。社を建つれば祟りありと伝ふ。総て熊野の山中には大

樹或は古木を神体とし、其境内雑樹鬱鬱として周囲数町に亘るもの多し其祭日には供物を木葉に盛り或は木葉を供ふることあり。通して木葉祭りといふ山中風俗の一端といふへし」(『紀伊続風土記』) [14]

山神森では「社を建つれば崇りありと伝ふ」と書かれており崇りがあるという伝承が残っている。この伝承を守り未だこの神社には社殿が建てられていない。こちらは「崇りがある」という伝承のみで実際にどういった内容の崇りがあるのかの記載はされていない。

・山田御神森 (和歌山県田辺市新莊村)

「社地周三町本村の中小名北原の田中にありて社なし大木を神体さす此木に霊ありて斧充れば崇をなす故に神をあかむ拝殿あり」(『紀伊続風土記』) [15]

こちらの伝承も「崇りが起こる」と明記しているが、実際にどういった内容で崇りがあるのか明記されていない。また社は建てられていないが、神を崇めるための拝殿は建てられている。無社殿社が禁忌として「境内に社殿を建ててはいけない」という伝承があるなか、こちらの伝承は、「木を伐ると崇りがある」だけで建造物を建てること自体は容認し、拝殿が建てられている。社は現在では本殿と呼ばれ、神を祀る場所とされ、拝殿は御神体を拝むための建物であるため、別物としてあつかわれ、神を拝むための建造物が建てられたのだろうか。和歌山の伝承にいくつか神木を伐るまたは斧を当てると崇りが起こると言われる伝承がいくつもある。

・神戸神社 (東牟婁郡古座川町高池)

「その昔、地元の有志が鳥居を建てようと神様にお伺いしたところ「鳥居は要らぬ。その代わり木材を献木して鳥居の高さよりも高い炎をあげ、夕刻から夜明けまで炎を絶やさずに焚き続けられ、氏子の安泰、家業の繁栄を見守ってやろう」とのお告げがあったそれが火焚神事の由来である。」(桐村 英一郎「祈りの原風景—熊野の無社殿神社と自然信仰」2016年) [16]

こちらは今までの伝承とは違い、「神」が実際に人々に伝えていることが特徴的である。以外の三つは詰まるところ、人々の考え方、または伝わっているという内容の伝承によって社殿(鳥居)が建てられなかったが、神戸神社の伝承では「神」自身

が不要と伝えている。また鳥居の代わりに「鳥居より高さよりも高い炎を炊き上げ、夕刻から夜明けまで炎を絶やさずに焚き続けられ、氏子の安泰、家業の繁栄を見守ってやろう」とお告げをしている。社殿を建てない理由として、安泰や繁栄を願うために、社殿を建てずに火焚神事を行い続けるために神のお告げを守り鳥居を建てないのは特徴的である。

以上の四つが自身で調べてきた中であった、社殿を建てることを禁忌としている伝承である。鳥居を建ててはならないという伝承もあったが、その神社も無社殿社である。自分自身で調べてみた範囲では、鳥居があり、社殿が建てられていない神社はいくつもあったが、鳥居がなく、社殿が建てられている神社は今のところ見つけていない。鳥居は境内の境界を示す指標のため、必要とする場所もあるが、鳥居を建てない時点でそこは移動概念が伴う「神」が存在するため、社殿は建てられていないと考えられる。

第四章 神木と伝承

熊野にある無社殿社の伝承を調査している最中に気付いたことがある。それは和歌山には木を伐ってはならないという伝承がいくつかあるということだ。和歌山は「木の国(紀伊国)」と呼ばれ、木を常日頃から大切にしている習慣があったと考えられる。日本古来の考え方として、古いもの大きいものには神霊が宿ると考えられており、特に神社境内の樹木には「神木」と呼び妄りに痛めつけてはならないと言われてきた。そして二又や三つ又になった木も神の座す場所として霊威視され、巨木や老木には「木の精」が宿ると考えられた。和歌山が「木の国(紀伊国)」と呼ばれるようになった伝説といくつかの伝承を紹介したい。

● 木の国の成り立ち

「昔、はるかな昔。須佐之男命(素盞鳴命)は我が瑞穂の国に木らしい木のないのに気がついた。そこで鬚鬚を抜いて息を吹きかけ杉の木種をつくった。次いで胸の毛を抜いて檜の木種を、尻の毛を抜いて榎の木種を、眉の毛を抜いて楠の木種をつくった。そして、御子の五十猛命・大屋津

姫命・栂津姫命の三神を呼んでこういった。「この木種を植えてよ。杉と楠は舟をつくるのに用い、檜は家をつくるのに、横は棺をつくるのに用いよ。」三神は早速その木種をこの地に植えた。これが「木の国の始まり」である。何年かたつて木の国は樹木が鬱蒼と茂り、良材を多く産する国になった。神武天皇が檀原ノ宮を造営する時、天富命が手置帆負・彦狭知の二神と共にこの国に入り、木を伐り出した正殿をつくり、手置帆負・彦狭知二神の子孫はこの地に住みつくことになった。その後、「木国」は「紀伊国」と書きあらわされるようになり、五十猛命・大屋津姫命・栂津姫命の三神はいずれもこの地に祭られ全国的に珍しい「木の神様」とされている」[17]

● 木に関する伝承

・寺山の犬傘松

「昔、印南町の寺山の頂上に大きな松の木があり、鹿々瀬峠からも印南からも見えた。日中、この松の影が日高平野を覆っていたという。ある時、久三という男がこの大木を伐ろうとして大斧を打ち込んだとたん発狂し、村人たちはこの木の祟りだといったという。」[18]

・蟻通神社の楠

「田辺市湊の蟻通神社に大きな楠がある。昔、この近辺に大火があった時、不思議にもこの楠の枝葉からさかんに白水が噴き出て延焼を食い止めたという。またある時、この楠の枝が社殿の上に延びてきたので伐り取ることになった。木こりが木の上のぼったがすぐに下りてきて「金の幣が目前にきて挽くことができん」という。二、三人替わってやってみたが同じことであった。最後にのぼった木こりが無理に鋸を入れたとたん木から落ちて大けがしたという。」[19]

・小又川の樅の木

「昔、龍神村小又川に樅の大木があった。ある時、杣人がこの木を伐りにかかったが、夜のうちに切り口が消えて元通りになっている。そこで夜通し様子を見ていると小法師風の木の精が伐り屑を拾い集めて切り口に詰め込んでいる。翌日から杣人たちは伐り屑を全部集めて焼いてしまう。二、三日後にこの大木を伐り倒した。するとその夜更けに杣人たちが寝ている所へ木の精達がやってきて

枕をひとつひとつ返していった。杣人の中に一人だけ信心深い男がいていつもお経を唱えていたが、その夜も寝言で般若心経を唱えていたので、木の精たちはこの男の枕だけは返さなかった。翌朝、この男以外の杣人はみんな死んでいたという。』[20]

・小又川の檜の木

「昔、竜神の小又川に檜の大木があった。ある時、木こりが七人かかつてこの木を伐り倒したところ、その夜木こりたちの寝ているところへ木の精があらわれ枕を一つ一つ返していった。すると、その翌朝この木こりたちはみんな死んでいたという。』[21]

・稲積の木

「昔から稲積（すさみ町）の木を伐ってはいけないといわれてきた。ところがある漁師がこの禁を破って稲詰みの木を伐り、船の艫の修理をしたところ、船は湾内をまわるだけでいくら漕いでも外海へ出なかったという。』[22]

・稲荷神社の神木

「慶長十年、浅野左衛門佐が稲荷山（田辺市）の神木を伐って船を造ったところ、船卸をしたとたん海中にしずんでしまったという。』[23]

紹介した伝承はすべて「伐り倒す」か「伐り倒した最中」に起きた恐ろしい出来事についての伝承である。特に「小又川の樅の木」と「小又川の檜の木」の伝承の内容はとてつもなく恐ろしい。この二つは木を伐り倒していた後に、木の精によって殺されてしまうと言った内容である。木の精が宿ると言うことは、大木か老木だったことがうかがえる。そのため和歌山では神社境内の神木問わず巨木や老木を大切に扱う文化が根付いているのではないだろうか。『熊野山海民俗考』の森と樹々の神座が多く存在している。このことから和歌山には木に特別な感情を持ち、神木として奉るなどして、大切に扱われていることがわかる。

第五章 現在の無社殿社

今回、社殿のない神社である無社殿社について語ってきたが、その無社殿社が消え去るかもしれないという話である。というのも神社の伝承を破り、社殿を建てるという話ではない。無社殿社が誰にも信仰されず消え去る可能性が高いのであ

熊野の無社殿社と伝承の関係性について—フィールドワークを主として—

る。それには、無社殿社が山奥の集落に建てられていることが関係している。現在、山の奥にある集落はもうすでに過疎化が始まってしまっているのだ。昔、林業によって栄えていた集落であったが、木材の需要が減り、高齢化によって人々が集落から離れてしまっているのが現状である。私が実際に無社殿社を訪れ、実際に感じた事や写真によって、無社殿社の現状を伝えたいと思う。

・和歌山県東牟婁郡古座川町峯の矢倉明神森

古座川の近くにある峯と呼ばれる集落にあるのが矢倉明神森である。現在では矢倉明神森とは呼ばれず矢倉神社と呼ばれている。峯と呼ばれる集落は現在6軒しかなく、全員が高齢である。山の中腹あたりにあり、峯に向かうには、一本道を自動車に登り、その後、集落の裏側にある神社を訪ねることになる。鳥居などの目印はなく、石階段を登れば、開けた場所となり、石灯笼と石祭壇があり、儀式の場として、または信仰されてきたの

だとわかるだろう。上記の通り、峯という場所と限界集落から、数年後には危ういと感じられた。

・三重県熊野市育生町赤倉の丹倉神社

高さ10cmほどの球状の大きな岩を神座としてしている。社殿はない。以前は巨岩の下に八幡社や稲荷社の小祠があったが、今はなくなっている。なくなった理由として、ここの神様は天狗の荒神様であるため、妙なものが置けないという理由で撤去された。今は神座から少し離れたところに小祠がある。丹倉神社の近くにある集落も過疎化が進み、今や数名しか住んでいない状況である。また交通アクセスもしづらく、40分ほどカーブが多い山道を通るため、地元の人でも危険である。丹倉神社はまだ珍しく巨大な岩を信仰している神社として紹介されたりなど、観光案内に出ているが、常に管理している集落の人たちがいなくなれば、どうなるかわからない。



図5 矢倉明神森（筆者撮影）
集落の裏山にある石階段。



図6 矢倉明神森（筆者撮影）
石祭壇がある。石灯笼などは倒れている。



図7 丹倉神社（筆者撮影）
この巨大な岩が神座として祀られている。



図8 丹倉神社（筆者撮影）
神座の下に祭壇と賽銭箱が設置されている。

● 終わりに

熊野は現在も多くの自然物を神座とした神社が多く存在している。特に木や森を神座としている神社の割合が大きい。木を神座としている神社が多い理由としては、熊野は林業が栄え、多くの人々が山を切り開き、集落をつくり、その集落内で、信仰されているのが無社殿社となっていると考えるのが自然である。木や森を神座としているのは、その場所を神聖な場所とし、山の神を祀る場所とするためであると考えられる。また無社殿社が多い理由の一つとして、伝承によって社殿を建てるのが禁忌とされている所がある。社殿を建てることによって不漁、不作、災厄が起こると言われている場所があり、社殿を建てるにしても「鳥居は御神体より高く」などの制限が付く神社などがある。このことから熊野には社殿を建てず、自然物を神座とした、古代から続く信仰の姿が残され続けられているのだと考えられる。

しかし、今そういった古代の信仰の姿が失われようとしている。和歌山県西牟婁郡すさみ町下村の矢倉神社は、昔は無社殿社であり、社殿を建ててはいけないという禁忌があったが、昭和55年にそれを破り社殿を建てることになった。他に無社殿社の多くは山奥に存在し、その集落ごとに祀られていたが、過疎化により管理する人たちがいなくなる可能性もある。伝承を破り、古代の信仰形態を崩すか、それともそのまま風化していくのか、どちらにしても存続は難しい問題である。

● 引用文献

『紀伊続風土記』に明記されているページ数は和歌山県神職取締所（明治43）活字版のものを使用している。

- [1] 野本 寛一（1990年）.『熊野山海民俗考』、人文書院 p250
- [2] 野本 寛一（1990年）.『熊野山海民俗考』、人文書院 p235～236
- [3] 野本 寛一（1990年）.『熊野山海民俗考』、人文書院 p236～239
- [4] 野本 寛一（1990年）.『熊野山海民俗考』、人文書院 p251～252
- [5] 野本 寛一（1990年）.『熊野山海民俗考』、人文書院 p254～255
- [6] 桐村 英一郎（2016年）.『祈りの原風景—熊野の無社殿神社と自然信仰』、森話社 p21～22
- [7] 『紀伊続風土記 第三輯 牟婁、物産、古文書、神社考定』（和歌山県神職取締所、1910年）p97
- [8] 『紀伊続風土記 第三輯 牟婁、物産、古文書、神社考定』（和歌山県神職取締所、1910年）p151
- [9] 『紀伊続風土記 第二輯 伊都、有田、日高、牟婁』（和歌山県神職取締所、1910年）p754～p755
- [10] 『紀伊続風土記 第二輯 伊都、有田、日高、牟婁』（和歌山県神職取締所、1910年）p737
- [11] 『紀伊続風土記 第二輯 伊都、有田、日高、牟婁』（和歌山県神職取締所、1910年）p676
- [12] 和歌山県神社庁 <http://wakayama-jinjacho.or.jp/jdb/sys/user/GetWjtTbl.php?JinjaNo=8043>
- [13] み熊野ねっと <https://www.mikumano.net/meguri/konoha.html>
- [14] 『紀伊続風土記 第二輯 伊都、有田、日高、牟婁』（和歌山県神職取締所、1910年）p699
- [15] 『紀伊続風土記 第二輯 伊都、有田、日高、牟婁』（和歌山県神職取締所、1910年）p659
- [16] 桐村 英一郎（2016年）.『祈りの原風景—熊野の無社殿神社と自然信仰』、森話社 p246
- [17] 和田 寛（1978年）.「和歌山の民話・伝説」（『和歌山の研究』5・方言・民族篇）、清文堂 p196
- [18] 和田 寛（1978年）.「和歌山の民話・伝説」（『和歌山の研究』5・方言・民族篇）、清文堂 p200
- [19] 和田 寛（1978年）.「和歌山の民話・伝説」（『和歌山の研究』5・方言・民族篇）、清文堂 p201～202
- [20] 和田 寛（1978年）.「和歌山の民話・伝説」（『和歌山の研究』5・方言・民族篇）、清文堂 p209
- [21] 和田 寛（1978年）.「和歌山の民話・伝説」（『和歌山の研究』5・方言・民族篇）、清文堂 p209
- [22] 和田 寛（1978年）.「和歌山の民話・伝説」（『和歌山の研究』5・方言・民族篇）、清文堂 p211
- [23] 和田 寛（1978年）.「和歌山の民話・伝説」（『和歌山の研究』5・方言・民族篇）、清文堂 p211

● 参考文献

- ・野本 寛一『熊野山海民俗考』（人文書院、1990年）
- ・桐村 英一郎『祈りの原風景ー熊野の無社殿神社と自然信仰』（森話社、2016年）
- ・「忘れられた熊野ー熊野大辺地筋に残る矢倉神社の群落ー」宮本 誼一『古美術』42（三彩社、1973）
- ・『紀伊続風土記 第二輯 伊都, 有田, 日高, 牟婁』（和歌山県神職取締所、1910年）
- ・『紀伊続風土記 第三輯 牟婁, 物産, 古文書, 神社考定』（和歌山県神職取締所、1910年）
- ・和田 寛「和歌山の民話・伝説」（『和歌山の研究』5・方言・民族篇）（清文堂、1978年）
- ・古座川町史編纂委員会編『古座川町史』（古座川町、2010年）
- ・矢倉信仰（最終閲覧日 2020年1月15日）
<http://kamnavi.jp/uga/ugayakura.htm>
- ・和歌山県神社庁（最終閲覧日 2020年1月15日）
<http://wakayama-jinjacho.or.jp/jdb/sys/user/GetWjtTbl.php?JinjaNo=8043>
- ・み熊野ねっと（最終閲覧日 2020年1月15日）
<https://www.mikumano.net/meguri/konoha.html>